朱子學禪考

久須本文雄

朱子が經傳佛老の諸學に出入し、殊に佛學に專念したことについては、

初先生學靡二常師一、出二入於經傳一、泛二濫於老釋一者、亦既有レ年。（朱子年譜、二四歲條）

熹於二釋氏之說一、蓋嘗師二其人一、尊二其道一、求レ之亦切至矣。（朱子文集、卷三〇、學蔀通辨、前編上にも引載）

とあるに徵してこれを知ることができる。陳淸瀾の學蔀通辨に

朱子初年之學、亦只說二一個心一、專說二求心見心一、全與二禪陸一合。（前編、卷上）

朱子早年嘗出二入禪學一。（同上）

李延平集に

熹少時亦曾學レ禪。（卷三、答問下）

とあるによつてもその所謂釋とは禪をさすものと謂える。茲を以て彼の思想に禪的傾向の存していることが窺われる。彼の禪的環境に於ける學禪の狀態を略々年次的に檢討して如何に彼が禪を修學したかについてその跡を窺つて見ようと思う。

一

既揭の李延平集及び學蔀通辨に於ける熹少時亦曾學レ禪或は朱子早年嘗出二入禪學一、更に朱子早年馳二心于禪學一（學蔀通辨、前編卷中）によつてこれを見るに、朱子は幼少既に心を禪學に向けていたようであるが、これが彼の禪に入る最初の動機でもあろうが、彼の何歲頃であろうか。これについて南宋の枯崖和尙の枯崖漫錄（三卷、林希逸の跋文あり）に次の如き資料を載せている。

肯庵圜悟禪師、建寧人、天姿閑暇、居二武夷山一、餘二十年一、（中略）、嘗授二儒學於晦庵朱文公一。（卷中）

佛祖歷代通載（第三〇）によつて肯庵圜悟禪師傳を見る

に

彼は臨濟十世の法孫にして名は克勤字は無著、彭州崇寧懸駱氏の子にして世々儒を業とし、幼時妙寂寺に遊び佛書を見て深く感ずる所あり、遂に祝髪して僧となる。後諸老に歴參し、最後に五祖法演に參じて法を嗣ぎ大いに禪風を擧揚した。殊に徽宗・高宗の兩帝はその德望を敬慕されそれぞれ佛果と圜悟の師號を賜うている。大慧宗杲等二十餘人の龍象を出だし從容錄と共に禪海の雙璧と稱せられる碧巖集を著わしている。南宋の高宗紹興五年八月五日、七十三歳を以て寂している。

かく佛果克勤は紹興五年（一一三五）に歿しているが、この歿年は朱子が南宋建炎四年（一一三〇）に生れているからして彼の六歳の時に相當している。それで朱子が五、六歳の時に佛果圜悟の歿年師事したことになる。枯崖漫錄の資料によると、圜悟が小童の朱子に儒學を授けたとなつているが、圜悟の家は世々儒學を以て業としていたのであるから、それは別に奇とするに足りない。彼は一世を風靡した禪界の巨匠であるから、朱子に儒學を授けるだけに止まらず、尙彼に禪的感化影響を及ぼさなかつたとは謂えないであろう。朱子がその禪的な啓迪と鉗鎚とを受けたことについては否定され得ないであろう。それで漫錄に所謂授儒學の文字表現のみに徵して、朱子の學禪問題を全く無視し禪と交渉なきものとすることはできないと思われる。この漫錄の記事を通して暗默の間に朱子の禪的修學が露呈されていることを看過することはできないであろう。彼が圜悟に師事したことによつて既に禪的環境におかれているので、茲に陰に陽に禪的影響を受けているものと謂える。朱子の生涯に於いて入禪の動機が圜悟に從事したことにあるとすべきである。圜悟に從學した六歳以後、劉胡に師事する十四歳に至る迄、朱子の學禪は不明であるが、既に大慧が圜悟に師事しているから、蓋し朱子は大慧その他の禪僧について禪を修學したであろうと思われる。

二

朱子が十四歳の時、卽ち紹興十三年に父韋齋（名松、字喬年、五六歳、一〇九八—一一四三）を喪つたのであるが、父の遺命に從つてその友胡籍溪（名憲、字原仲、一〇八六—一一六二）・劉白水（名勉之、字致中、一〇九一—一一四九）・劉屏山（名子翬、字彥冲、一一〇一—一一四七）の三師に從學した。卽ち

稟三學胡籍溪劉屏山劉草堂三君子之門」。

（年譜、一四歳條）

韋齋疾以二家事一屬二劉子羽一、而訣二于籍溪胡憲、白水劉勉之、屏山劉子翬一、且俾二先生父事レ之。

（宋元學案、卷四九）

と。三子は彼を心から撫敎に當つたが、その後二劉相繼いで卒し、胡籍溪に師事すること最も久しく、成年に至る迄主としてその薫陶を受けた。父韋齋は羅豫章に從學し、同學李延平と親交があり、南宋の初に於ける醇儒であつて、劉・胡三子とも互に親を致し、四子は莫逆の交りをなした。朱子は三師殊に屏山と籍溪とについて

初師二屏山籍溪一、籍溪學二於文定一、又好二佛老一、然於二佛老一亦未レ有レ見、屏山少年能爲二舉業一、官二莆田一、接二塔下一僧一能入定、數日後乃見二了老一、歸レ家讀二儒書一、以爲與レ佛合、故作二聖傳論一、其後屏山先亡、籍溪在。

（朱子語類、卷一〇四　學蔀通辨、續編卷中にも引載）

と記している如く、兩師は佛學を好み、屏山の如きは一僧の接化にあいて入定し、遂に道を體得した程であつた。朱子の屏山墓表に劉公の言として

吾少未レ聞レ道、官二莆田一時、以二疾病一始接二佛老子之徒一、聞二其所謂淸淨寂滅者一、心悅レ之、以爲道在レ是矣、比レ歸讀二吾書一而有レ契焉、然後知二吾道之大其體用之全乃如レ此。

（屏山集、屏山先生劉公墓表）

と、屏山が欣然として悟後の心境を陳べている所に徵しても、彼の受けた佛禪の影響の多大であつたことを知ることができる。全祖望は宋元學案に於いて屏山・籍溪は論ずる迄もなく、白水も共にその學禪臭を帶びざるものはないとして次の如く論じている。

三家之學略同然似二皆不レ能レ不レ雜二于禪一。

（卷三四、劉胡諸儒学案）

陳建も學蔀通辨に於いて

屏山劉子翬、籍溪胡憲、皆朱子少時師也、朱子初年學レ禪、亦以二二人之故一。

（續編　卷中）

と、朱子初年の學禪は劉・胡二師によるものとし、全祖望の所論と同じく殊に劉・胡の禪的修學を認めている。

陳建の所謂

朱子初年學レ禪、亦以二二人之故一。

は稍〻過評と思われるが、然し劉・胡三師の學禪は否定され得ないから、朱子が禪臭ある三子に師事して暗默の間に自然と禪的感化を受けたとすべきであろう。朱子が三師から受けた禪的感化は彼が師事した十四歲の時から始り、それ以後屏山の歿する紹興十七年迄五ケ年、白水の卒する紹興十九年迄七ケ年、籍溪の死する紹興三十二年迄二十ケ年、それぞれその間に三師から禪的薫陶を受けたとすべきである。

かく朱子は十四歲にして劉・胡三子に從學して禪的感

化を受けていたのであるが、その師事の間に於いて十四歳以後の學禪についてみるに次の如き資料がある。

朱文公少年不レ樂レ讀二詩文一、因レ聽二一尊宿說レ禪直指二本心一、遂悟二昭々靈々一著一、十八歳請學、時從二劉屏山一、屏山意二其必留二心舉業一、暨レ搜二其篋一、只大慧語錄一帙爾、次年登科、故公平生深知二禪學骨髓一、透二脫關鍵一、此上根利器、於レ此取足者也。

（佛祖歷代通載、卷三〇、大慧條）
（佛法金湯編、卷一五、朱子條）

これは晉陵の尤焴（字貳卿）が嘗て大慧語錄に題したる文であるが、これによると朱子は十八歳の時進士に擧げられる以前に、一尊宿から直結人心見性成佛の禪要を聞いて遂に昭々靈々底の一著子を見得している。更に

某年十五六時、亦嘗留二心於此一、一日在二病翁所一、會二一僧一與レ之語、其僧只相應和了說也、不レ說二是不是一卻與レ劉說レ某也、理二會得箇昭々靈々底禪一。

（語類、卷五）

に徵しても、朱子が十五、六歳の時からして禪學に留念して劉屏山の所に於いて一禪僧に接化されて遂に昭々靈々底の禪を體得していることが知られる。佛祖歷代通載に於いては朱子が十八歳請學前に於ける學禪であつて、朱子語類に於ける某年十五六時と年齡の點に於いて兩者相契合していると謂うべきで、共に病翁劉屏山の下に於いて從學中禪僧に參じて昭々靈々底の禪要を得ていることに徵しても兩資料の相異しないことが認められる。その所謂一僧とは勿論禪僧であるが、誰を指しているのであろうか。これについて佛法金湯編に

向蒙二妙喜開示一、應レ是、從前記事文字、心識計校、不レ得下置二絲毫許一在中胸中上、但以二狗子話一時時提撕、願受二一語一警レ所レ不レ逮。

（卷一五　朱子條）

と。これは朱子が開善道謙禪師に出した書中の一節であつて、右の書中に蒙二妙喜開示一と記しているが、この所謂妙喜とは大慧宗杲の號であつて彼の居した妙喜庵から稱したのである。それで該文は朱子が嘗て大慧に參禪して禪門初入の一關である趙州和尙の狗子佛性の話頭を提示されたことを記するもので、朱子が劉屏山の所に於いて參禪したる一僧とは大慧であるとすべきである。朱子は開喜道謙と交涉ある以前に病翁劉公の下に於いて大慧に參じて狗子無佛性の公案について提撕を受けたことゝなる。それで昭々靈々底の一著とは趙州狗子無佛性の話頭を指すものと思われる。朱子が大慧に參禪問道したのは紹興十七年彼が十八歳請學以前卽ち十五、六歳の時であることは語類に徵しても明かである。大慧は南宋の孝宗隆興元年西紀一一六三（一〇八九生）に示寂し、朱子は南宋の高宗建炎四年西紀一一三〇（一二〇〇歿）に生れ

ているから、大慧は朱子が三十四歳の時に七十五歳を以て入寂している。それで兩者の交渉については年代上疑問とする所がないから首肯され得る。大慧の傳は佛祖歷代通載第三〇・五燈會元第一九・禪宗正脈第十九等に記載されているが、これ等に徵して彼の略傳を茲に記してみよう。

大慧性は奚氏、諱は宗杲、字は曇晦、宣州（安徽省宣城縣）の出身。宋の哲宗元祐四年に生る。十七歳にして薙髮し遍く諸家の語錄を涉獵す。その後、曹洞の諸老宿に從い湛堂準禪師、無盡居士等に謁し圜悟克勤に參ず。圜悟の下にて省悟し、法を圜悟に嗣ぐ。これより名叢林に振い京師に聞え遂に紫衣並びに佛日大師の號を賜う。師妙喜庵に居を構えたるを以て自から妙喜と號す。紹興七年高宗詔して徑山に住せしむ。雲衲一千、大いに宗風を振い道法の盛なること古今に冠たり。故に世人稱して臨濟の再興となす。紹興十一年待郎張九成のために上堂す。秦檜のため衡州及び梅州に竄せられ居ること十年、茲に於いて正法眼藏を著す。紹興二十五年乙亥冬、孝宗の恩赦に浴し北に歸る。時に師六十七歳。七十四歳の時、孝宗より大慧禪師の號を賜い恩寵益加う。南宋の孝宗隆興元年、壽七十五歳を以て寂す。普覺禪師の諡號を賜う。

大慧の略傳によると、彼は秦檜のため衡梅兩州に竄貶せられることその間十年、佛祖通載の乙亥冬蒙恩北還（第三〇、大慧條）に徵しても漸く紹興二十五年冬恩赦に浴しているが、紹興十六年齡五十八から流貶せられたことになる。朱子が屛山の下にて大慧に參禪した十五、六歳は大慧の五十六、七歳の時で貶せられる前年に當つている。これを以てしても朱子と大慧との交渉はこれを否定することができないであろう。既揭の佛祖通載並びに佛法金湯編に於いて朱子が十八歳にして科學に赴く（翌紹興十八年登第）時に師劉屛山は舉業に留心せんことを念い、その篋を探れば大慧語錄一帙（枯崖漫錄卷中には篋中所携惟孟子一册大慧語錄一部耳とある）存していたと記している所によつて、朱子が大慧語錄を愛誦していたことが窺われる。屛山が朱子の篋中から語錄を發見したのは既に大慧が流貶した以後の事であるが、朱子が大慧に參禪した頃から既に閱讀していたものと思われる。この語錄の愛讀は朱子が如何に大慧を心から尊崇敬慕し私淑していたかが知られる。（大慧語錄は大慧が入寂後約十年卽ち宋の孝宗乾道の未年詔して大藏經に入れられたが、朱子が十八歳の時に大慧の語錄を閱讀しているからそれ以前卽ち大慧の寂する約そ十五年前に既に上梓され流布されていたとすべきである。）大慧は當時の禪界を風靡し

た善知識であるから、朱子が彼に崇敬の念を致し參禪したのも當然と謂うべきで、少年朱子に及した思想的影響の多大であつたことは看過され得ないであろう。朱子は仁を以て心の德、愛の理と定義して心の德は專言的仁、愛の理は偏言的仁となしている。彼は、

愛之理卽是心之德、不二是心之德一又別有二箇愛之理一、偏言專言亦不二是兩箇仁一。（語類、卷二三）

と、愛の理は卽ち心の德にして理と仁とは其理則仁也（語類　卷二〇）と畢竟相卽一如であるとしている。かく理義と仁義との相卽不離となす朱子思想の根據は

杲老亦非レ之云、理義之義、卽是仁義之義、如何把二虛空一、打做二兩截一、妙喜之說、便是如レ此然。（語類、卷一二六）

に徵して大慧の啓迪開導によるものではないかと思われる。

朱子が大慧に參禪して昭々靈々底の禪要を得たのは、彼が十五、六歲の時であることは上論に徵して明かであるが、次に十五、六歲以後に於いて禪僧との交渉について窺つてみよう。

朱子が大慧の法嗣である開善道謙に贈つた書中の一節を佛法金湯編に徵して既に提示したのであるが、これによつて道謙との交渉がなされたことが知られる。その書中に所謂向蒙二妙喜開示一は大慧との交渉以後に於いて道謙との交渉がなされていたことを朱子自から述べているのでこれに徵しても明かである。延平の李侗（字愿中、一七五三―一八二三）が羅博文に與えた書があるが、この書中に次の如き一節がある。

渠（元晦）初從二謙開喜處一下二工夫一來、故皆就二裏面一體認、今既論難見二儒者路脈一、極能指二其差誤之處一、自レ見二羅先生一來、未レ見レ有二如レ此者一。（李延平集、卷一）

李延平は羅豫章（名從彥、字仲素、一七三二―一七九五）に從學したのであるが、年譜によると朱子は紹興二十三年二十四歲にして始めて延平に師事している。延平の羅博文に與えた書中に所謂

元晦初從二謙開善處一下二工夫一來。

に徵して、朱子が二十四歲の時延平に從學以前既に道謙に參禪問道し靜坐功夫をなしていたことが知られる。朱子が道謙に送つた書中の向蒙二妙喜開示一と延平が羅博文に與えた書中の元晦初從二謙開善處一下二工夫一來とによつて、朱子は大慧との交渉以後延平に從學する以前に、卽ち十五、六歲から二十四歲迄の間に於いて道謙との交渉がなされたこととなる。それでは朱子が道謙に師事參禪したのは何歲頃であつたであろうか。この點については

儒者側に資料が乏しいので、佛者側の文獻に徵してこれを推定するより方法がない。道謙が寂した際、彼に對する朱子の祭文が存しているが、佛法金湯編にこれを載せている。卽ちこの祭文の一節に

丙寅之秋、師(道謙)來二拱辰一、乃獲二從容笑語日親一。

(卷一五)

とある。その所謂丙寅之秋は朱子の存命中ただ一回あるのみで、高宗の紹興十六年(一一四六)の秋を指すのであつて朱子が十七歲の時に當つている。尙、祭文の中に

未レ及二一年一師以レ謗去。

(同 上)

とあるに徵して、道謙がそれより一年も過ぎない內に卽ち紹興十七年に誹謗を受けて仙洲を去つていることが知られる。それで道謙との交涉は朱子が十七歲の秋から十八歲に亘つてなされていたことが考えられる。兩者の交涉はそれ以後に於いても

往還之間見レ師者三。

(同 上)

とあるから、再三なされていたものとすべきである。然しそれは短い期間と考えられるが、相當長期間に亘る交涉は朱子が十七歲から十八歲に亘る一年未滿の間であつたと思われるのである。

朱子と道謙との交涉は上論の如く朱子の十七、八歲の時になされたことになるが、兩者は如何にして交涉がなされたかについて佛家側の資料によつてこれを見てみよう。

大慧の法嗣である南宋の感山雲卧曉瑩の雲卧紀談(三卷)に

謙後歸二建陽一、結二茅于仙洲山一、聞二其風一者悅而歸レ之、如二會侍郎天游、呂舍人居仁、劉寶學彥脩、朱提刑元晦一、以二書牘一問レ道、時至二山中一。

(卷下、枯崖漫錄卷中にも記載)

とある。雲卧紀談は紹興年間(自一一三一—一一六二)に曉瑩が修道の警策となる數百條を蒐集したもので、作者の生歿は不詳であるにしても、朱子存命中の作であることは疑い得ざる所で、この點に於いて朱子に關する資料としては信憑し得られるものと思われる。この雲卧庵主による紀談の一節は朱子が十七、八歲に徑山謙首座に參禪中の時卽ち道謙が仙洲を去る以前の記事であつて、これによると朱子が道謙の道價を敬慕して彼に師事し書牘を以て或は相見して進んで禪要を問い求めている朱子の學禪に對する積極的態度が窺われる。朱子の道謙に對する書簡或は參禪による兩者の問答の狀態について佛法金湯編その他雲卧紀談・枯崖漫錄等に次の如くこれを載せている。

公嘗致二書於開善道謙禪師一云、向蒙二妙喜開示一、應レ

是、從前記事文字、心識計校、不レ得レ置二絲毫許一在中胸中上、但以二狗子話一、時時提撕、願受二一語一、警レ所レ不レ逮、師答曰、某二十年、不レ能レ到二無疑之地一、後忽知レ非、勇猛直前、便自一刀兩斷、把二這一念一提撕、狗子話頭、不レ要二商量一、不レ要二穿鑿一、不レ要レ去二知見一、不レ要二强承當一、公有レ省。

（佛法金湯編、卷一五、朱子條）

これは朱子が大慧の啓迪を受けたがまだ省するに至らずその及ばざる所あるを自覺し、書簡を以て道謙の提撕を受けようとしたのに對して、師道謙は趙州の狗子無佛性の公案を以て專ら拈提して商量を要せず總べてを放下し去つて一路に勇猛直前すべしと答えたものである。道謙の示教を得て朱子は省得する所があつた。雲臥紀談卷下及び拈華漫錄卷中に於いては更に詳しく道謙の朱子に對する懇切な返書を載せている。卽ち

有レ答二元晦一、其略曰、十二時中、有レ事時、隨レ事應レ變、無レ事時、便回レ頭、向二這一念子上一提撕、狗子還有二佛性一也無、趙州云、無、將二這話頭一、只管提撕、不レ要二思量一、不レ要二穿鑿一、不レ要レ生二知見一、不レ要二强承當一、如二合レ眼趂二黃河一、莫レ問二趂得過趂得不過一、盡二十二分氣力一、打二一趂一、若眞箇趂二得這一趂一、便百了千當也、若趂未レ過但管レ趂、莫レ論二得失一、莫レ顧二危亡一、勇猛向前、更休二擬議一、若遲疑動念、便沒交涉也。

と。更に朱子の師道謙を祭る文に徵して兩者の關係を見るに、佛法金湯編に

師卒、公祭以レ文、略曰、我昔從レ學、讀二易論孟一、究二觀古人之所二以聖一、旣不二自揆一、欲レ造二其風一、道絕徑塞、卒莫レ能レ通、下從二長者一問レ所レ當レ務、皆告レ之言、要二須契悟一、開悟之說不レ出二於禪一、我於二是時一則願レ學焉、師出二仙・洲一、我寓二潭上一、一嶺間レ之、但有二瞻仰一、丙寅之秋、師來拱辰、乃獲二從容笑語日親一、一日焚レ香請二問此事一、師則有レ言、決定不是、始知二平生浪自辛苦一、去レ道日遠、無レ所レ向レ津、未レ及二一年一、師以レ謗去、我以二行役一不レ得二安住一、往還之間見レ師者三、見必欵留、朝夕咨參、師亦嘉レ我、爲說二禪病一、我亦感レ師、恨レ不二速證一、別其三月中秋一書、已非二手筆一、知二疾可レ虞、前日僧來爲欲二往見一、我喜作レ書曰、此良便書已遣矣、僕夫遄言、同舟之人告以二訃傳一、我驚使レ呼、問以二何故一、於乎痛哉、何奪之遽、恭惟我師具二正偏知一、唯我未レ悟、一莫二能窺一、揮レ金辨レ供泣二於靈位一、稽首如空、超二諸一切。

（卷一五、釋氏資鑑にも載す）

と。この祭文によると朱子は嘗て易・論・孟によつて聖

たる所以を究めたが、通ずることができず遂に禪學によつて契悟すべきことを教えられているが、如何に彼が禪の修學を切に願つていたかが知られる。朱子は師道謙に書簡を以て禪要を問うだけに止まらず直接相見して示教を求めている。所謂一日焚香請二問此事一云云とあるによつて單なる相見ではなくして入室獨參底の修禪であつたとすべきである。道謙が仙洲を去つてからも再三相見しているが、見必欵留、朝夕咨參と實に彼の熱心な參禪の態度が窺われる。兩者の交渉は獲二從容笑語日親一とある如く極めて親密なものとすべきで、茲を以て朱子は師亦嘉レ我、我亦感レ師と記する所以である。この朱子の祭文によると師弟問學の狀態殊に朱子の窮禪の念深きことが知られると共に、師道謙の入寂するに當り哀惜の情切なるものが窺われる。朱子と道謙との交渉は上述の如く實に親密で、朱子が彼から受けた禪的影響は多とすべきであろう。

以上は主として朱子の青年朝に於ける學禪の狀態を資料に徵してこれを窺つたのであるが、彼が十四歲にして禪的素養ある屏山・籍溪二子に師事して禪的感化を受けてから二十四歲李延平に從學する迄約そ十年間は終始熱心に禪要の修得に精進している。その間屏山の下に於いて彼の十五、六歲の時大慧に、十七、八歲にして道謙にそれぞれ參禪していたことは明かである。殊に道謙との交渉は十七、八歲以後に於いてもなされているからしてその期間は蓋し朱子の十七歲後半から十九歲頃迄と推定せられる。それで彼の青年期に於ける學禪は歷然たるものであつてこれを否定し去ることはできないであろう。

三

朱子の青年時代に於ける學禪について述べたから、次は彼が延平の李侗に師事して以來專ら排禪毀釋の色彩が熾烈になるに至つた頃迄を中年期としてこの時代に於ける彼の學禪の狀態をみようと思う。

朱子は十九歲の春進士に及第し、二十二歲の春泉州同安縣の主簿となり、二十四歲にして同安に赴任しようとして往きて延平の李侗に師事して學を受けた。李延平は程門の高弟楊龜山門下の羅豫章に、朱子の父韋齋と共に師事した。延平の人と爲りについては朱子が

先生資禀勁特、氣節豪邁、而充養完粹、無二復圭角一、精純之氣達二於面目一、色温言厲、神定氣和、語默動靜端詳閒泰、自然之中若レ有二成法一、平日恂恂、於レ事若レ無二甚可否一。　（朱子文集、卷九七）

と稱している如く、實に温厚篤實にして圭角なく德望人に優れ、鄧迪の所謂氷壺秋月瑩徹無瑕（延平集、卷四）は

能く彼を評しているものと謂うべきである。彼は實踐窮行を旨とし品性の陶冶と氣習の矯正とに於ける存養に力を用いた。而して彼は專ら靜坐澄心をなし、これによつて未發以前の所謂中なるものを求める功夫をなした。卽ち延平が朱子に與えた書中に

某曩時從二羅先生一學問、終日相對靜坐、某未レ有レ知、退入二室中一亦只靜坐而已、先生令四靜中看二喜怒哀樂未發之謂レ中、未發時作二何氣象一。（李延平集、卷二）

とあるによつても知られる。彼に於ける爲學の道は劉平甫に與える書の

學問之道、不レ在二多言一、但默坐澄心體二認天理一。（同上、卷一）

大率有二疑處一、須二靜坐體究一。（同上）

或は朱子に諭した

非二文字言語之所レ及也。（同上 卷三）

によると、禪家に所謂言詮不及不立文字底で專ら靜坐體認に存するものとした。延平は靜坐澄心によつて未發的中の體認をことゝして專ら靜坐を重視したが、學蔀通辨に

靜坐體認之說、非二聖賢意一也、起二于佛氏一也、六祖所謂不思善不思惡、認二本來面目一宗旨、正此也、宗杲所謂無事省緣、靜坐體究、亦此也。（終編、卷中）

と記している如く、延平の靜坐體究は六祖及び大慧の禪要に契當するものと思われる。それで延平の說は靜坐體認による直覺的頓悟涵養にあるからして、蓋し大乘圓頓の禪機に類するものであろう。太田錦城も

雖下從二李洞一受レ學棄レ佛入上レ儒、然師傳授之說、全然禪家頓悟之機。（稽古錄）

と論じている。延平は決して懸空守寂枯木死灰的な存養を說くものでなく、應事接物日用平常の間に於ける着實な功夫を重視したのである。上述の如く延平の靜坐澄心天理體究は禪旨に近似するものと謂うべきで、玆を以て彼に禪的色彩の存することは否定できないと思われる。延平はその學を豫章に受け朱子に相傳したるもので、これによつて朱子の學の由來する所が知られると共に延平の禪機が及した影響も看過できないであろう。師延平が門人朱子を推重し敬服していたことは、延平が羅博文に與えた書中に所謂

元晦進學甚力、樂レ善畏レ義、吾黨鮮レ有、晩得二此人一、商二量所レ疑甚慰、又曰、此人極穎悟、力行可レ畏、講學極造二其微處一、某因二此追求一有レ所レ省、渠所二論難一、處、皆是操レ戈入レ室、須下從二原頭一體認來上所以好說話、某昔於二羅先生一得二入處一、後無二明友一幾放倒了、得二渠如、此極有レ益一云云、自レ見二羅先生一來未レ見レ有二如レ

此者。　（李延平集、卷一）

に徵してこれを知ることができる。朱子はその學延平に得る所鮮少でなく深く相默契する所があり、朱子が柯國材に答えた書に

熹自延平逝去、學問無分寸之進、汩汩度日、無明友之助、未知終何所歸宿。（朱子文集、卷三九）

とあるによつて、彼もまた如何に延平を敬重し心を師に向けていたかが窺われる。朱子が延平に師事したる當初は徒らに議論多くして着實な所なく空理に偏着していた如くである。茲を以て朱子は延平によつて

李先生云、公恁地懸空、理會得許多、而面前事卻有理會不得。　（延平集、卷三、答問下）

と痛くその非なるを指摘され注意を促されているが、他面懇切に

道亦無幽玄、只在日用間、着實做工夫處理會便自見得。　（同　上）

と戒諭され指導を受けている。これによつて朱子は道を日用行往坐卧の間に求め、遂に小乘禪から大乘的中道神の段階に至りたるものとすべきである。それで延平集に於ける

此人別無他事、一味潛心於此、初講學時、頗爲道理所縛、今漸能融釋、於日用處一意下工夫、若於此漸熟則體用合矣、此道理全在日用處熟、若靜處有而動處幷則非矣。　（卷一、與羅博文書）

に徵して、朱子は延平の示教を得てより、その非を悟り專ら日用事上底に着實な工夫をなし、空理的禪弊から脱して大乘禪の立場にあることを證するもので、これ着實にして實際的反求的な延平の學風にも依る所が多い。朱子は動中靜靜中動の動靜一如體用一源の理を見得するに至つたものと謂える。延平の所謂此道理全在日用處熟は搬柴喫飯行住坐卧に於ける日常坦然の心その儘が大道に通ずるとする禪家の平常心是道の境地を表わすものである。尙、延平が朱子に教示した所謂非文字言語之所及也（既揭）或は靜坐體認の說に於ける彼の禪的なものが、陰に陽に朱子の思想性行に及ぼさなかつたとは謂えないであろう。朱子は延平に從學して以來約そ何歲頃迄老釋に出入して心を空妙の域に馳せていたかを窺うに、陳建は學蔀通辨に朱子の廖德明に對する言を語類から引用して

廖德明錄癸巳所聞云、先生言、二三年前見得此事、尙鶻突、爲他佛說得相似、近年來方省得分曉。　（前編、卷上）

と記し、これについて陳建が次の如く評している。

按癸巳朱子四十四歲、言二三年前、則正是四十歲

前、而近年看得分曉、則正是四十以後、尤可レ徵也。
（同　上）

これらに徵して見るに、癸巳の年卽ち朱子が四十四歲の時に當るのであるが、それより二、三年前卽ち四十一、二歲頃迄は老釋殊に禪學を究めていたものとすべきである。朱子が薛士龍に答えた書に

熹自レ少愚鈍、事事不レ能レ及レ人、顧嘗側聞二先王君子之餘敎一、粗知レ有レ志二於學一、而求レ之不レ得二其術一、蓋舍レ近求レ遠、處レ下窺レ高、馳二心空妙之域一者二十餘年、比乃困而自悔。
（朱子文集、卷三八）

とあるが、その所謂馳二心空妙之域一者二十餘年によっても、蓋し朱子が大慧に參禪した十五、六歲或は道謙に參禪した十七、八歲から約そ二十餘年卽ち四十歲乃至四十一、二歲頃迄專ら心を禪學に馳せていたようである。それで朱子の中年時代と稱したのは、延平に師事した二十四歲から四十一、二歲頃迄の時期を指すもので、卽ちこの十八、九年間禪學に留念したのであるが、如何なる禪僧に師事して禪要を究めたかについては資料が存しないので窺うことができ得ない。大慧が朱子三十四歲の時七十五歲（西紀一一六三）を以て世を去っているが、大慧は紹興二十五年（西紀一一五三）に約そ十年に及ぶ流貶を赦免されているので、それ以後寂年迄約そ九年間卽ち朱子の二十六歲から三十四歲迄の間に於いて、彼は大慧と交涉する機會がないではないから、蓋しその間に於いて朱子が大慧に參禪したであろうかと考えられる。尙朱子が十七、八歲に參禪した道謙であるが、彼の傳記は不詳で資料が存しないので明かにされないけれども、大慧の法嗣である關係からして、大慧の寂後も生存したと考えられるから、蓋し朱子はこの中年時代に道謙との交涉もなされたのではないかとも思われる。

以上述べた所は朱子の中年期に於ける學禪についてであるが、專ら空理空論に偏していた彼は二十四歲の時禪味ある延平に從學して始めて、禪の要諦が日用行常底に着實な工夫を致すにあることを自覺し動靜一貫體用合一心境一如の大乘禪を體得するに至つたとすべきである。かくの如く朱子は延平に師事してからは、彼の思想並びに爲學的態度の上に大なる轉換を釀し來たつたことは明かで、朱・李の會見は彼の思想上實に劃期的重要な意義をもつものと謂うべきで、夏炘が

乃師弟授受之大淵源、學問轉關之大節目。
（述朱質疑、卷一）

と評する所以も玆にある。朱子は儒に對しても禪に對してもその見解態度に於いて、從學以後はそれ以前に比して相當面目を新たにしているものと謂える。それで延平

は朱子の學問思想の上に重要な役割を果たしているものと謂うべきである。朱子は三十三歳の時、孝宗卽位の初に壬午應詔封事を奉つているが、その上奏文の中に

記誦詞藻非所以探淵源而出治道、虛無寂滅非所以貫本末而立大中、帝王之學必先格物致知以極夫事物之變。（朱子文集、卷一一）

と、孝宗が徒らに記誦詞藻の末梢に走り或は老釋の道に留意するを戒め、虛無寂滅は本末を貫きて大中を立てる所以で無く、國家の經倫には必ず儒道によるべきことを說いている。これによると排佛毀釋の態度が明かに現われているが、この奏上は彼の三十三歳の時である所から考えると、この頃からして排佛的色彩が現われ始めたことを證するものと思われる。延平に師事の當時は潛在的であつた排佛毀釋の態度が十年後になつて上奏文となつて表面に現われ始め、漸次その色彩が深厚になつていくのである。三十三歳前後からその排佛毀釋的態度が表面化してはきているが、それ以前延平從學當初は勿論それ以後（四十一、二歳頃迄）に於いても二十四歳以前に比して薄弱ではあるけれど、學禪を廢せず進んで禪學の究明が續けられていたとすべきである。朱子は中年以後に於いて益々排佛毀釋が熾烈を極めるに至るのであるが、然し四十歳頃迄の學禪からして却つて自ら矛盾接着を醸すことゝなつた。それで四十一、二歳以後を朱子の疑問期と稱すべきで、中年以降の朱子と禪とを次に窺つてみたいと思う。

四

朱子は中年以後晩年に亘つて漸次排佛毀禪熾烈を加えその態度が極めて積極的になつてきているので、この頃の朱子には殆んど學禪の跡を史料に徵して窺うことができない程である。彼に於ける學禪の記事は得られないけれども、それ以前に於いて專ら修得に力めた禪の影響によつて佛禪的な色彩が窺見され、彼の歸儒に關してその言行に疑問と思われる點が存しているようである。卽ちその諸點を茲に擧げるならば次の如くであろう。

第一に彼が排禪毀釋してはいるが、自からその中に禪的な口吻と禪語とが相當多く現われている。これについては彼の「學說と禪」の論稿に於いても觸れることゝする。

第二に彼は排禪を唱えながら然もその反面に於いて禪を修學している。旣述の如く彼は三十三歳の時孝宗に壬申應詔封事を上つて排佛歸儒を奏して排禪斥佛の態度が現われているにも不拘、他面上揭の所謂馳心空妙之域者二十餘年に徵して、それ以後も學禪していることが認

められる。

第三に彼は盛んに排禪を主張しているけれども、禪家の坐禪に類している靜坐默想等を實踐し且つそれを勸めている。彼の靜坐說に關しては後に讓ることにするが、朱子靜坐說（正德四年開版）によつてその二、三を窺うに

明道教二人靜坐一、李先生亦教二人靜坐一、蓋精神不レ定則道理無二湊泊處一、又云須二是靜坐一方能收斂。（語類、一二）

靜坐無二閒雜思慮一則養得來便條暢。（同上）

又問、伊川嘗教二人靜坐一如何、曰亦是他見二人要レ多二思慮一、且以レ此教二人收二拾此心一耳、若二初學者一亦當レ如レ此。（同上、一一）

とある。かくの如く靜坐は遠くは明道に發し近くは延平これを說く所で、朱子は精神思慮を收斂する工夫としてこれを說いている。精神が安定しなければ道理湊泊する所なきが故に專ら靜坐によるを要すべきとし、殊に初學に於ける靜坐の必要性を說いている。

第四には彼はその居宅及び書院・書堂等に精舍の名稱を附しているが、これは彼がその言行に於いて佛禪的傾向から脫し得ないことに依るものと思われる。年譜、五十四歲及び六十五歲の條によると、

四月作二武夷精舍一、正月經始、至レ是堂成、始居レ之、四方士友來者甚衆。

十二月竹林精舍落成、後更レ名曰二滄洲一、先生旣歸、學者甚衆、至レ是落成、率二諸生一行二釋菜之禮一。

とある。所謂精舍とは寺刹であること論を俟たざる所であつて、藝文類聚・釋氏要覽等によると精練なる行者の住む居宅である。上揭の年譜に徵しても、極力排佛毀禪にこれ力めた五十歲以後に於いて、朱子が敢えて精舍の名稱を用いたことは、彼の言行に對して疑問をいだかしめることゝなろう。彼が精舍の名を用いていることによつて、その排佛歸儒を疑うのみならず、彼が佛敎的風習を愛好してこれを尊重したとも謂えるであろう。從つて

精舍規約整肅置二堂長一以司レ之。（年譜、六五歲條）

に徵し、彼が精舍に於いて佛禪的生活をなしその淸規を遵守し實踐していたと考えられる。彼が佛禪を排毀しているもの、それは外面上形式的なものとも思われ、その裏面に於いては力めて佛禪的雰圍氣に浸り佛禪的感化影響を受けていたことは否定できないと思われる。

以上を以て中年以降に於ける朱子の排佛歸儒に對してその疑問と思われる點を擧げたのであるが、これらの諸點に立脚して彼の歸儒を疑い殊にその晩節を論議する者さえいる。王陽明の如きは朱子晩年定論（傳習錄所收）

を作り、殊に朱子が何叔京に答えた兩編の書を擧げて、彼の晩節は陸象山並びに自家の說と符を合し軌を同じくしていることを證するものであるとしている。朱子の何叔京に答えた書を見るに、

向來妄論二持敬之說一、亦不三自記二其云何一、但因二其良心發見之微一、猛省提撕、使二心不昧一、則是做二工夫一底本領、本領既立、自然下學而上達矣、若不レ察二良心發見處一、卽渺々茫々恐無二不レ手處一也、中間一書論二必有レ事焉之說一、卻儘有レ病、殊不レ蒙二辨詰一何邪、所レ喩多識二前言往行一、固君子之所レ急、熹向來所レ見亦如レ此、近因反求未レ得二箇安穩處一、卻始知二此未レ免二支離一、如レ所レ謂因二諸公一以求二程氏一、因二程氏一以求中聖人上、是隔二幾重公案一、曷若レ默二會諸心一以立二其本一而其言之得失自不上能レ逃二吾之鑒一邪。（傳習錄、下文集、卷四五）

前レ此僭易拜稟二博觀之弊一、誠不三自撥一、乃蒙レ見レ是、何幸如レ此、然觀二來喩一、似レ有レ未レ能二遽舍一之意上何邪、此理甚明、何疑之有、若使レ道可中以二多聞博觀一而得上、則世之知レ道者爲レ不レ少矣、熹近日因レ事方有二少省發處一、如二鳶飛魚躍一、明道以爲レ與二必有レ事焉勿レ正之意一同上者、乃今曉然無レ疑、日用之間觀レ此流行之體初無間斷處有中下二工夫一處上、乃知日前自誑誑人之罪、蓋不レ可三勝贖一也、此與レ守二書冊一泥中言語上、全無二交涉一、幸於二日用間一察レ之、知レ此則知レ仁矣。（同上）

と。この書について陳建は學蔀通辨に於いて次の如く論駁している。

朱子斯書、道一編指爲三朱子晩合二象山一、王陽明採爲二朱子晩年定論一、據二年譜一、朱子四十歲丁二母祝孺人憂一、此書有二奉レ親遣レ日之云一、則視無レ恙時所レ答、朱子年猶未二四十一、學方日親未レ已、與二象山一猶未二相識一、若二之何一得レ爲二晩合一、得レ爲二晩年定論一邪、其顚倒誣誑、莫二斯爲レ甚。（前掲、卷上）

右答二何叔京一二書、學專說レ心、而謂レ與二書冊言語一無中交涉上、正與二象山所レ見不レ約而合、此朱子早年未定之言、而篁墩陽明矯取以彌二縫陸學一、印二證己說一也、云云。（同上）

通辨によると陽明は答何叔京書を以て朱子晩年の定論として朱子晩節の說は陸禪に合するとするに對して、陳建はこれを難じて晩年の定論でなく朱子早年に於ける未定の說で

戊子、孝宗乾道四年、朱子三十九歲、答二何叔京一書云。（通辨、前編、卷上）

と朱子三十九歲（淳照二年朱子四十六歲の時に何叔京は歿している）に於ける所論としている。そして陳建は陽明が

年歳早晩を顚倒して朱子を矯誣し後學を誑誤し以て陸學を彌縫するものとして其顚倒誣誑、莫二斯爲一甚（既揭）或は

不レ知下其顚二倒早晩一矯二誣朱子一以彌二縫陸學上、其爲レ都益以甚矣。（通辨、總序）

と論じている。尙この外、陽明の朱子晩年定論を論駁するものに、明の羅欽順（羅整庵集存稿、卷一）・馮柯（求是編、卷三）・淸の陸稼書（三魚堂文集、卷二）・顧炎武（日知錄、卷一八）・張烈（王學質疑）等がいるが、他方陽明を辨護するものに淸の李紱（朱子晩年全論）・吳鼎（東莞學案）等がいる。朱・陸の論爭は朱・王の分爭となり、遂に淸朝に迄波及しているが、畢竟門樞の爭論に過ぎないであろう。論駁諸家の中、殊に嘗て禪を修め、禪文學の精華とも稱すべき永嘉玄覺の證道歌を愛誦したる羅整庵（困知記、卷二所載）は陽明に書を與えて痛くこれを駁している。

偶考得、何叔京氏卒二於淳熙乙未一、時朱子年方四十有六、爾後二年丁酉、而論孟集註或問始成、今有レ取二於答書一者四通、以爲二晩年定論一、至二於集註或問一、則以爲二中年未定之說一、竊恐二考レ之欠レ詳而立論之太果一也。（羅整庵集存稿、卷一、與王陽明書）

この羅整庵の論難に對して陽明が書を以て答えて曰く、

其爲二朱子晩年定論一、蓋亦不レ得レ已而然、中間年歳、早晩誠有レ所レ未レ考、雖レ不二必盡出二於晩年一、固多下出二於晩年一者上矣、然大意在下委曲調停以レ明二此學一爲上レ重、平生於二朱子之說一、如二神明著龜一、一旦與レ之背馳、心誠有レ未レ忍、故不レ得レ已而爲レ此。（王文成公全書、卷二、答羅少宰書）

と。陽明の答書に徵して、彼はその年歳早晩未だ考せざる所あるを認めている點に過誤のあるのは惜むべき所であるが、此の學を明かにせんために心誠有レ未レ忍、故不レ得レ已而爲レ此と謂うはその心意諒察すべきものがある。朱子晩年定論を論駁する諸家は、陽明を以て異端の從にして曲學の計をなしたるものゝ如く評しているが、王學者は定論を以て修學上好個の指針とせざるものはない。王門の袁慶麟が朱子學に專念すること三十年なるも自得する所なく、陽明に從學し定論を讀みて始めて省悟する所を得たと定論跋[註]に述べている所を以てしても、定論が如何に爲學上に功のあつたかを知るに足るものと謂える。上揭の陽明の所謂固多下出二於晩年一者上矣に徵して盡く晩年の說に屬するものと斷定することができず、晩年の說の存することも認めざるを得ない。朱子が何叔京に答えた書は陽明も認めている如く晩年の定論とは見られないし、陳建說の如く四十歳頃の朱子の說を早年未定の

所論ともなし難い。蓋しこの頃の朱子はその思想學說に於いて大體確定しているものと見られ、茲を以て排佛毀禪の擧に出で始めている。彼の排禪斥佛が熾烈になり始めているにも不拘、上揭の答何叔京書に於ける默會諸心以立其本或は與守書冊泥言語全無交涉は朱子の四十歲以前並びにそれ以後に於ける學禪を證するものであろう。それで陽明が定論に答何叔京書を引用するは僞妄であると論駁している。太田錦城も疑問錄下に於いて、前句を以て達磨の所謂直指人心見性成佛となし、後句を以て禪家の不立文字教外別傳を現わすものではないかと評しているが、明かに兩句は禪の要諦を現わしているものと謂うべきである。尚、陳建が既揭の如く答何叔京書の兩編について通辨に

學專說心而謂與書冊言語無交涉、正與象山所見不約而合。

と論じ、或は後句について其馳心空妙可見（前編、上）と評している所を以てしても、その學禪の狀態を窺知することができる。

定論に對して朱子年歲の早晩異同に關する論議が烈しくなされ、殊に排王論者の論峰鋭く異端邪說と迄陽明を非謗するに至つたのであるが、かく論議の焦點が早晩の問題にあるにしても、かゝる問題に關せず朱子の中年以降に於ける彼の學禪について、既に疑點の存していたことは否定され得ないことゝ思う。彼に非禪歸儒の態度が漸次明確になりつゝあるにも不拘、その反面に上述の如く答何叔京書に於いて禪的思想が窺見されることも否定できない。茲を以て中年以後に於ける彼の學的態度は所謂陰禪陽儒にあつたとも評すべきであろう。太田錦城も疑問錄下に於いて「程朱ノ學ハ陽儒陰佛ノ學ト云ベシ」と論じている所である。殊に朱子の晩節については陳建が學蔀通辨に於いて

迨中年以後、朱子見道益親、始大悟禪學近理亂眞之非、晚年益覺象山改換遮掩之弊、自此乃始直截說破、顯然攻之矣。（前編、中）

朱子晚年排禪排陸、明正學之實。（同　上）

と論じている如く、彼は禪陸の弊を悟つて本來の儒に歸り、禪陸の學を排すると共に正學に專念していた樣であるが、然し裏面に於いて禪學に意を向けていたと思われる。それで彼の排禪歸儒の態度が明確を欠いている樣であるからして、その排禪と歸儒とに對して疑をはさまざるを得ない。茲を以て太田錦城が

朱子晚年ニハ小々奮見ヲ改ラレタレト、先入爲主佛老ノ說ハ終ニ全クハ脫セズ。改悔セラレシトハ云ヘト改メ悔ラレヌモ同シ事ニテ、只小々ノ違アルノミナ

リ。晩年トテモ眞ノ孔孟ノ道ニハ非ル也。

（疑問錄、下）

終不レ能下超二脫浮屠之範圍一而移中進聖人之階庭上、可レ惜之甚也。

（稽古錄）

と評している所以である。錦城が朱子の學は晩年に於いても眞の孔孟の聖道ではないと稱している點は過評にしても、晩年儒の點に後人の疑惑を留めているのは否定し難い。朱子が烈しく排佛毀禪しながらも、過去永年に亘つて熱心に修得した佛老殊に禪が、腦裏に蘊蓄して先入主となつて終生禪界から脫し得なかつたとすべきで、錦城もこれを認めている。

五

以上朱子の少年期より晩節に至る迄を約そ五期に區分して、彼の學禪についてこれを資料に徵し詳細に檢討してきたのであるが、茲にこれを要約することゝする。

朱子の少年期に於ける學禪であるが、彼は五歲の時に大慧の師佛果圜悟によつて儒を學ぶ傍ら禪的研槌とその啓迪とを受けたとすべきであろう。茲を以て彼の禪門初入の動機が佛果克勤による學禪に存するものとすべきでこれは彼の將來に於ける禪の修學に大きな意義をもたらすものであることを看過することができないと思われる。そして彼が圜悟克勤に師事して儒を學ぶと共に禪を兼修したことは、蓋し彼の陰禪陽儒的な學的態度が既にこの時から性格化されてきたとも謂うべきであろう。

この少年期に於ける修禪が彼の思想性行の上に及した感化影響の鮮少でなかつたことは否定できないと思われる。克勤に師事して以後十四歲迄の間は蓋し大慧に參禪したであろうと思われる。

次に青年期であるが、彼は十四歲の時禪的素養のある劉・胡二師に從學してその禪的感化を受け、十五、六歲の時師屛山の下に於いて大慧に參禪して趙州狗子無佛性の一着子の公案を授けられ昭々靈々底の禪要を修得している。次で十七、八歲にして大慧の法嗣開善道謙に參禪し書簡並びに相見によつて禪要を得ているが、十九歲頃迄師事したと推定せられる。朱子が大慧の語錄を常に愛誦し且つ道謙の歿した際その祭文を書いて深く師を哀悼していることは、如何に彼が兩師を敬重しその思想的影響を受けていたかが察せられる。特に朱子と道謙とは實に親密な交渉がなされていたもので、彼の受けた禪的影響は多大であつたとすべきである。青年期に於ける朱子の修學は禪を主として儒を從としたとすべきで、これ以後漸次その主從を轉換するに至つていると謂える。

中年期に於いては二十四歲にして李延平に師事してい

るが、空理に偏していた朱子は禪的な延平によつて儒禪の要諦が日常底に存することを自覺するに至つた。彼が延平に從學してその禪機を受け思想性行の上に大なる轉換をもたらしたことは明かで、延平が朱子に與えた思想的影響は多とすべきである。孝宗に上奏した壬午應詔封事によつて三十三歳頃から排佛毀禪の色彩が現われ始め中年以後次第に熾烈になつていくのである。然し大慧及び道謙に參禪していた青年期に於ける學禪に比して薄弱ではあるが、四十歳頃迄の中年期も禪を修學していたとすべきであろう。中年期に於いては彼が師事參禪した禪僧は不詳で窺見され得ないが、蓋しこの間道謙に參禪していたのではないかと思われる。大慧が流貶赦免されたのが朱子の二十六歳で、その寂年が彼の三十四歳の時に相當しているから、この九年間に於いて蓋し彼が大慧に參禪したものと推定せられる。

中年以後に於いては殊に排佛毀禪が熾烈で、彼の學禪についてこれを窺うことができない狀態である。排禪期の朱子に佛禪的傾向の存している點を擧げたが、その排禪帰儒の態度について後人の疑感を釀しているので、中年以降を朱子の疑問期と稱すべきであろう。王陽明は朱子晩年定論を作りて朱子の晩年は陸王の說と契同するものとしたが、この定論に對して羅整庵・馮貞白・陸稼書・陳清瀾・顧炎武・太田錦城等の諸家はこれを論駁し、陽明を以て曲學僞妄の徒となした。陽明が惑めているが如く、彼が朱子の年歳早晩を充分考定しない所に過誤があり、朱子の答何叔京書は晩年の定論とは思われないし、尙、定論に晩年の說の存することも認めざるを得ない。朱子年歳の早晩に關せず中年以後に於ける彼の學禪に既に疑點のあつたことは看過されないであろう。排禪帰儒の態度が明かになりつゝあるにも不拘、答何叔京書に禪的思想が窺見されることは否定され得ないであろう。中年以後に於いては、專ら排禪帰儒にあつたとは謂え、過去において修學した禪から脫し得ず、その裏面に於いて禪的色彩が窺われるからして、前期と同じく禪を修學し禪的關心が存していたとすべきである。

最後に朱子の晩年期であるが、晩期に於いても本來の儒に帰つて專ら陸禪を排していたが、その反面に於いては禪から逃避することなくそれに留念していたことは、中年以降と別に趣を異にしないと思われる。太田錦城が朱子の晩年でも眞の孔孟の道ではないと稱していることは、過評とは謂えその晩年に疑問の存することは看過され得ないことであろう。

上述の如く朱子の晩年迄を五期に分けて要略したのであるが、これによつて佛果圜悟の師事に彼の禪入門の動

機があり、積極的に禪の修學に專念したのが彼の青年期で、これ以後次第に排禪毀釋の傾向が盛んになるにつれ學禪の跡を見ない。朱子は中年以後熾烈に排佛毀禪に力めているが、晩年に至つても過去永年學禪から全く蟬脫し得ず陰に陽に禪に專念していたものと思われる。それで彼の儒禪に對する態度は所謂陰禪陽儒にあつたものと評すべきである。陳建が學蔀通辨に於いて

吾儒說二禪說一、禪說亦是儒、禪家說二儒說一、儒說亦是禪。（續編、卷上）

と評しているが如く、朱子は禪を自家藥籠中のものとしこれを以て儒に攝取し彼が學說思想を立てたとすべきであろう。排禪毀釋の最も根本的な理由根據は佛禪が倫常を無視する點に存するとするもので、排禪の極は一面的な禪弊を以てこれを排毀することは、蓋し方便的で朱子のみならず一般人の通弊とすべきであろう。朱子は排禪毀釋するにも不拘、他面に於いて禪を修學し、殊に中年以後晩年に亘つてその思想性行に禪的なものが窺見されるのはその排禪歸儒を疑われる點で、實に彼の眞意那邊に存するかその態度明確を欠くが如し。殊に青年期に於ける學禪は明かで、朱子が佛果圜悟・大慧宗杲・開善道謙の三師に參禪したことは否定することができない。彼が參禪した三師は師弟の關係にあつて共に臨濟宗楊岐派に所屬しているから、蓋し朱子は臨濟禪の系統をくむもので、此の點に於いて彼は臨濟禪の思想を受けているものとすべきであろう。朱子の所謂馳心空妙之域者二十餘年に徵して、彼が十五、六歲から四十歲頃迄約そ二十餘年の間專ら學禪に力めたのであるが、その前後に於ける修禪を加えると六歲から歿年迄になろうが、實に生涯に亘るものと思われる。朱子の學禪は排佛毀釋の現われ始めた三十三歲頃を境として、それ以前は陽禪的、それ以後は陰禪的なものとせられる。この三十三歲以前殊に青年期に於ける修學は禪を主として儒を兼ねたもので、それ以後は次第に主客の位置を換えるに至つている。太田錦城は疑問錄（下）及び稽古錄に於いて、陳建は學蔀通辨（前△中）に於いてそれぞれ朱子思想の三變について述べているが、兩說共大同小異なるも、要するに青年期迄を第一變遷期として學禪にありとし、中年期を第二變遷期として禪弊改悔歸儒にありとし、それ以降を第三變遷期として排禪並びに學禪にありとしている。この三變說は本節に於いて述べてきた所に徵しても認められ別に趣を異にするものではないと思う。

朱子が參禪私淑したる禪僧並びに閱讀したる佛禪の書について、これを語類・全書・文集その他に徵して窺つてみよう。

彼が師事參禪したる禪僧は佛果・大慧・開善の三師であつて、私淑尊信したるものは達磨・臨濟・惠遠・僧肇・契嵩・法眼・潙山・宗密等が擧げられているが、殊に彼は大慧を敬重し熱心に參禪辨道したるもので、彼の思想性行に及した影響は多とすべきである。彼が閲讀したる佛禪書は般若心經・大慧語錄・肇論・楞伽經・圓覺經・金剛經・傳法正宗記・維摩經・四十二章經・大般若經・華嚴經・法華經・遺敎經等その他多數に上つているが、殊に彼が愛誦して常に坐右から離さなかつたのは大慧語錄であつた。尙、六祖檀經・臨濟錄・起信論等も閲したことは勿論で、時代の風潮としてその他數多くの禪籍を涉獵したことであろう。大慧並びに開善から與えられた公案は狗子無佛性の話頭で、これによつて兩師から直接禪要を究明した。尙、彼は狗子無佛性の公案の外、麻三斤・乾屎橛の公案によつても禪的功夫をなしたが、潙仰宗の祖である唐の潙山靈祐の眞俗二諦を說いた不受一塵不捨一法の偈は彼の好んで屢〻用いる所である。朱子が直接或は關接に關係したる禪僧・禪籍・公案等に徵しても彼の學禪とその受けた禪的影響を無視することはできないと思われる。終りに既に論述してきた朱子の學禪について年次的にこれを摘記してみれば次の如くである。

南宋高宗建炎四年 西紀一一三〇生

六歲 佛果圜悟（歿年）に儒禪修學

十四歲 大慧宗杲に參禪？

屏山・籍溪に師事し禪的感化を受く

十五、六歲 屏山の下にて大慧に參禪

十七、八歲 開善道謙に參禪、以後暫く師事

十九歲

二十四歲 李延平に師事して禪機を受く

二十六歲 （紹興二十五年大慧赦免）

三十三歲 大慧に參禪？

三十四歲 此の頃から排佛毀禪始む（隆興元年大慧七十五歲寂）

四十一、二歲 此の頃から晩年にかけて排禪毀釋熾烈

←　此の間開善に參禪？　→

寧宗慶元六年 西紀一一二〇歲歿 七十一

←禪し蓋もるす儒歸禪排→
べすとたしなも学修の
←（期間疑）うろあでき

註　袁慶麟の朱子晩年定論跋文抄

麟無一似從二事於朱子之訓一、餘三十年一非レ不二專且篤一、而竟亦未レ有二居安資深之地一、則猶以爲二知之未レ詳而覽之未レ博也、（中略）、及レ讀二是編一、始釋然、盡投二其所レ業、假レ館而受レ學、蓋三月而若レ將レ有レ聞焉、然後知二獨之所レ學、業、假乃朱子未レ定之論、是故三十年而無レ獲、今賴二天之靈一、始克從二事於其所謂定見者一、故能三月而若レ將レ有レ聞也非二吾先生一幾乎已一矣、敢以告二夫同志一、使レ無二若麟之晩而後悔一也、（中略）、是編特爲レ之指レ迷耳。

（傳習錄、卷下所收）

追記　朱子の思想と禪については日本福祉大學紀要（昭和三十九年）に拙論「朱子の心性論に於ける禪的なもの」を掲載したから本論文と併せて參照されたい。